の夕暮れ　　廣間菜月

これもオンラインの出て来る歌が多いなかの一首。同じ画面の中の何人かが、それぞれの土地の西日にてらされているのである。参加者がどこに住んでいるのか分からないが、もし北海道の人、沖縄の人がいたらどうだろう、などと読者は楽しませてもらえる。

お菜太き茎葉に塩の浸み入りてお菜漬にならむ真冬の時間(とき)よ　　尾上　宏

「お菜漬」は野沢菜漬けのこと。長野県独特の呼び方らしい。寒い寒い冬の時間が、野沢菜漬けの味の深みを作り出すのだ。他の歌に、八十キロのお菜に塩、昆布、唐辛子をまぜる、とある。毎年、編集部宛に野沢菜漬けを送ってもらうので、みな楽しみにしている。

マッチとは何かを説明するために三ページ目でひと休みする　　門田祥子

小さな子供に「マッチ売りの少女」を読み聞かせて居る場面。なるほど、現代はマッチを知らない子供の方が多いだろう。マッチをまったく知らない子に「マッチ売りの少女」の話を理解させるのは大変だと思う。さらに「……我が子は知らぬ雪の冷たさ」ともあった。宮崎生まれの子はまだ雪を知らないらしい。雪を理解させるのは、マッチを理解させるより大変かもしれない。こう考えてくると、この一首の切り口の鋭さ、なかなかのものである。

つまるところ独りの人生だつたのか散骨を望みて友は逝きたり　　太田冨美恵

散骨とはつまり、自分の墓はいらないとの宣言だというのである。この友がどういう人生を送ったのか、作者とどういう関係なのかは分からないが、作者には意外な思いだったらしい。友とはいえ、簡単には推し量れない故人の人生感が思われて、しんとした気分にさせられる。

往来の人らの愛でて通ひぬし鴇色のさざんくわ散り始めたり　　奥山かほる

散りはじめたら人々はあまり見なくなった、そんな意味がさり気なく伝わってくるところが持ち味だろう。花は咲いているあいだだけ人々の目や心を引きつける、そんな当たり前が、クローズアップされることで、余韻を生じた、と見る。

十三年講師の部屋の主(ぬし)となり教へ子の子と同僚になる　　沢野唯志

「……教へ子の子と同僚になる」に立ち止まった。私にはそういう体験はないが、その感慨は分かる。定年のあと講師になって十三年経ったということなのだろうか。上句、やや舌足らずでわかりにくいのが残念。

これよりは気ままにさせてなるものか花美しき外来種抜く　　沢田昌子

ネットで「花のきれいな　外来種　雑草」と入れてみると、ヒメジオン、トキワツユクサ、ムラサキカタバミなど、写真とともに多くの花の名前が出て来る。たとえばムラサキカタバミは江戸時代に日本に持ちこまれたものだが、地下茎が旺盛でどんどん増えるので、要注意外来生物に指定されている、とある。